

日記の一節

六四

小山登美子

めづらしいお天気、子供達と共に散歩にゆく。

あゝ暖い日の光り あゝ優しいそよ風

若草の萌え出でた 美しい野原

子供達は思ふ存分躍び跳る、少し遊び疲れると子供達は足もとの小さい花を見つけて摘み草をはじめました。

「先生、ここにもスミレがあるのよ」と信夫ちゃん。
ん。

「タンポポがあつた！」と義雄ちゃん。

皆一心にお花を摘む、そのうち信ちゃんはスミレを摘みながら詩のやうな言葉を口づさんだ。それをきいた私も思はず一緒にうたつてしまつた。

スミレ タンポポ タクサンアルヨ
スミレ ツモウカ ココニモヒトツ

こうして書いてしまつては、あまりに情緒が浮ばないけれど、あの時、あの野原でスミレを摘みながら思はず、あの子の口から漏れ出た時！ 私は何とも云へない心持になつた。

× × ×

今日は雨降りだつたので、子供の姿を静に見る事が出来てうれしかつた。一番はじめに來たのが浩ちゃん。私と二人きり。そつと後から見えてゐると、一人で紙を巻いたり伸したり、ラツバのやうに吹いてみたり、覗いたり、たつた一枚の紙を色

々と變化させて愉快さうに一人で靜に私の傍にゐるのも忘れて遊んでゐる。決して一人で遊べなかつたこの子、人に頼らなければ遊びを見出す事の出来なかつたこの子、いつもくちよこくと、おちつきのないこの子に、こんな性質があつたのかと本當にうれしかつた。靜かな、しづかな環境は非常に必要だと思つた。深く考へさせられた日だ。

× × ×

朝早く近くの原に野の花を取りにゆく、まだあたりはほの暗く朝露はしつとりと、地上にうるほいを與へてゐる。甘草の花や名も知らない花が露をふくんで優しくつゝましく、ほゝゑんでゐる。この優しさ、この氣高さ、踏まれても踏まれても咲き出づる強さ！ あゝ私もこのやうでありた

す！

(五〇頁よりつゞく)

その頃は若かつたしと私は言つたが、今でもまだ、自分の昔話をする程に老いてはゐない筈である。しかも、こんな話を長々と書いたのは、三十年記念號といふ目出度い本誌上に於て、本會と本誌との光榮ある舊名稱を今更に追憶し、その舊名に對しては敢て自ら忍ぶべからざるを忍んだ當時の私の心持を叙して、更めて舊名稱にゆるしを乞はんとするのである。

